

女優の川島なお美は五十四歳の若さで「肝内胆管ガン」で亡くなった。

「胆管ガン」は「すい臓ガン」とならぶ死に神様である。

女は男よりはるかにアルコールで肝臓をこわしやすという。

ワインが胆管ガンの引き金になったとも言われるが、医学の世界における因果関係は不明なことが多い。

彼女の胆管ガンについてセカンドオピニオンを求められた近藤誠医師（元慶応大病院）は月刊誌の「文芸春秋」で次の自説を展開している。

- ① 肝内胆管ガンの手術は危険である。メスを入れたところにガン細胞が集まり急激に暴れ出すことが多い。
- ② 手術を受けていなければ余命がさらに延びた可能性が高い。
- ③ 抗ガン剤を拒否したことは賢明であった。致命的毒性をもつ抗ガン剤の投与をうけていけば寿命はもつと短くなった。
- ④ 外科医は自分たちの仕事がなくなくなるからとにかく患者を手術にもちこもうとする。
- ⑤ 腹腔鏡下手術は切開手術と比べて時間が長く麻酔の影響など体への負担も大きい。
- ⑥ 彼女が手術と併用したビタミンCの濃縮点滴は、アメリカで効果が否定されており、折り紙付きの高額医療

詐欺といつてよい。⑦ 肝臓に針を刺して病巣を焼く「ラジオ波焼灼術」ならメスを入れるのと違いガンの転移が低い。放射線をピンポイントで当てるより効果が期待できる。

弁護士日記

川島なお美の胆管ガン手術は死期を早めてしまったのか？

美和 勇夫

私はこの方法を勧めた。⑧ しかし結局彼女は外科医の説得で手術の道を選んだのである。

私はこの方法を勧めた。推論、暴論である。病院は利益をあげてもらうためにガンの手術をやっているのではなく、患者のためを考えて、より適切な治療を行っている。

抗ガン剤投与が死期を早めるということも、パチンコは最盛期で毎年三〇兆円の利益を生むビジネスといわれた。医療費は現在でも毎年三〇兆円を超える。巨大な産業である。抗ガン剤は石油から造成するがグラムで七万円。金の何百倍もする高額商品である。重い副作用として造血機能の破壊、赤血球、白血球、血小板の激減があげられている。

抗ガン剤は言ってみれば「原子力発電所」みたいなものである。この理屈も説得力がある。しかし「あなたはガンです」といわれたとき、無力な我々としては医者にすぎるしかない。いずれの選択が正しいのかは、結局、原発と同じで当面結論が出ない。

胆管ガン手術を受け 胆管ガンは胆管に沿